



Title	内分泌攪乱化学物質をめぐる生活と食の安全について
Author(s)	田口, 鐵男
Citation	癌と人. 1999, 26, p. 2-3
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/23819">https://hdl.handle.net/11094/23819</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 内分泌攪乱化学物質をめぐる生活と食の安全について

田 口 鐵 男\*

我々を取りまく環境中には様々な化学物質が、農業、工業排水、生活排水あるいは焼却場の排煙として排出されている。これら人工的な化学物質中にはダイオキシン、PCB有機塩素系の農業、ノニルフェノール、ビスフェノールAなどがよく知られている。ダイオキシン、PCBのように毒性の面から注目されている化学物質のほかに、今まではあまり問題にされていなかった化学物質の中にも、驚くべきことに女性ホルモン様作用のあるものが約70種類もあることがわかってきたという。また男性ホルモンや甲状腺ホルモンの作用を邪魔する化学物質も見出されている。このようにホルモン様の作用を持ったり、あるいはホルモンの働きを邪魔するような化学物質は、正式には“外因性内分泌攪乱物質”というが、環境中に放出されてホルモン様の作用を持つことから「環境ホルモン」という用語がつけられマスコミ等に頻繁に取り上げられている。

環境ホルモン問題は我々の生活に密着した製品が発生源になっているので、私たちの生活習慣の問題でもあるわけだ。そこで、この問題に詳しい京都大学の森千里先生からお話を聞く機会があったので述べてみたい。

「環境ホルモンの人体への影響に関しては何もわかっていないというのが正式のコメントだが、疑いがあるという段階であろう」というのが最初のコメントであった。

環境ホルモン問題は決して新しい問題ではなく、1940年代から北アメリカの五大湖周辺で農業による大規模な汚染から端を発しているようである。すなわち、「胎児期から幼児期にかけて環境ホルモンにさらされると、生殖器の奇形

や生殖障害がおこり、子孫を残すことに大きな影響を与えるのではないか」といわれている。昨年（1998年）6月29～30日東京で開催された国際シンポジウムでは米国環境保護局の迅速な対策組織の設立など、内分泌攪乱物質に対する国外の対策内容が紹介された。

米国では1996年8月に2つの法改正を行い、米国環境保護局に内分泌攪乱化学物質の評価、分析法の開発を義務づけているとのことである。そして、この法律を受けて環境保護局は、専門家を集めて内分泌攪乱化学物質のスクリーニングと試験法に関する諮問委員会を組織し、化学物質の安全性の評価手法を確立するための専門組織としたそうである。このように専門組織を設立することは、情報の収集などで重複のない迅速な対応を可能にするものである。日本では未だ省庁別に問題に取り組んでいる状態で、省庁間に連絡会は設けられているものの専門家も少ないため、肝腎の研究体制の整備、進展が遅れているようだ。

東京の会議では食品用器具から内分泌攪乱化学物質として疑われている化学物質の溶出量についての最新研究なども紹介されて、注目を集めたようである。

環境ホルモンといわれる多くの物質は蓄積性があり、それらは生態系で生物濃縮する。すなわち、植物連鎖の中で次第に濃縮していくので、環境中に放出される濃度が低くても問題があるという。日本人は魚介類を好むので、とくに貝類は濃度が非常に高いことが明らかになっており、船底塗料に含まれるトリブチルスズが巻き貝（イボニシなど）に作用して雌の生殖器に雄の生殖器が生じていた（インボ・セックス）こ

\* 財大阪癌研究会常任理事 大阪大学名誉教授

とが明らかになっている。いろいろな貝類を食べることで人体での蓄積の進むことが考えられるわけである。

このような中で、現在もっとも大きな問題になっているのがヒトの精子数の減少である。

また、停留睾丸や子宮内膜症などの生殖器異常も問題になっている。さらに、環境ホルモンが精巣がんや乳がんの原因になっているという研究もある。

環境ホルモン問題は我々の生活に密着した製品が発生源になっているので、みんなで生活習慣を変えていくことが必要である。環境ホルモンの研究には時間がかかる。したがって、実際

に異常が現れてからでは遅い。今から研究を進めて対策を立てておくことが肝要であろう。

森先生によれば、「環境ホルモン問題でパニックになる必要はまったくない」そうで、「とくに生殖能力については成人した人が普通に生活していて問題が起きる段階とは考えていない」とのことで、「むしろ自分の子孫のことを考え、それぞれの立場から環境問題を見つめなおすよい機会にすべきだ」と述べられていた。

この頃はマスコミがいろいろの問題を異常な取りあげ方をして大衆をある方向にもってゆきたがる傾向があるので、我々は冷静沈着に行動する必要がある。

## ガン予防の十二か条

日常生活で実行してみましょう。

- ① いろどりの豊かな食卓にして、バランスのとれた栄養をとる。
- ② ワンパターンではありませんか。毎日、変化のある食生活を。
- ③ おいしい物も適量に、食べ過ぎは避け、脂肪をひかえめに。
- ④ 健康的に飲みましょう。お酒はほどほどに。
- ⑤ たばこを少なくする。新しく吸い始めることのないように。
- ⑥ 緑黄色野菜をたっぷり。食べ物から適量のビタミンと繊維質のものを多くとる。
- ⑦ 胃や食道をいたわって、塩辛いものは少なめに、あまり熱いものは冷ましてから。
- ⑧ 突然変異を引きおこします。焦げた部分は避ける。
- ⑨ 食べる前にチェックして、かびの生えたものに注意。
- ⑩ 太陽はいたずらものです。日光に当たり過ぎない。
- ⑪ いい汗流しましょう。適度にスポーツする。
- ⑫ 気分もさわやか。からだを清潔にする。

——国立がんセンター提唱——